

地方における子育て支援のニーズと支援活動 — 夜間託児施設の設立に向けた取り組みから —

Needs and Support Activities for Child-rearing Support in Rural Areas —Insights from Initiatives towards Evening Childcare—

天 野 佐知子（金沢星稜大学人間科学部こども学科助教）

Sachiko AMANO (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Assistant Professor)

塚 本 遼 一（福野家守舎）

Ryoichi TUKAMOTO (Fukuno Yamorisha)

〈要旨〉

本研究の目的は、地方において夜間保育、夜間託児のニーズがどのようにあるのかを調査し、地方の夜間保育を取り巻く意識や環境、子育て世代が必要としている子育て支援について考察することである。その結果、夜間保育施設には、夜の時間帯に会合や仕事などが入った際に、2～3時間程度預かってもらう一時預かり的なニーズがあることが明らかとなった。また、物理的、環境的要素だけでなく、心理的な面が子育ての支援のニーズに影響していることが確認された。そして夜間だけでなく、休日の一時預かりのニーズがあることも見る事ができた。一方で、他人に子どもを預けることへの抵抗が、ニーズはあるものの実際の利用までに至っていない要因になっていることがうかがわれた。

〈キーワード〉

キーワード: 子育て支援, 夜間託児, 夜間保育, 利用者のニーズ, 支援利用までの壁

1 研究の背景

現在、子育て支援の取り組みは行政、民間など幅広く、多様な機関で行われている。支援の形として、子育てに必要な費用等を支援する経済的支援や、子育て当事者の心理的な面を直接的にケアする支援等があり、支援の在り方も多岐にわたる。こども家庭庁「令和7年版 こども白書」(2025)では、国が行う支援の政策について、「子育てや教育に関する経済的負担の軽減（経済的側面での支援）」、「地域子育て支援、家庭教育支援（子育てにおける当事者の時間的、心理的、体力的負担の軽減につながる支援）」、「共働き・共育の推進、男性の家事・子育てへの主体的な参画促進・拡大（家庭内での子育てをしやすくするための労働環境を整える支援）」、そして、より経済的、人的資源が不足する「ひとり親家庭への支援」の4つに分類して示されている。

特に、「地域子育て支援、家庭教育支援」では、2015年度より施行された子ども・子育て支援新制度以降、国や各地方自治体において、子育て援助活動支援事業（ファミリー・サポート・センター事業）や一時預かり事業、地域子育て支援拠点事業等の拡充を推進している。実際、地域

子育て支援拠点事業の実施か所数は、令和5年度で8,016箇所存在し、毎年増加している（こども家庭庁、2025）。浅井（2025）は、地域子育て支援拠点利用前後での母親の子育て不安の変化を調査し、利用前は悩みや不安を相談する場所がわからないという不安、子育てに対する不安やストレス、子どもの生活や遊びの不十分さ、外出する機会の不足を感じていたが、利用後はこうした不安や不足が緩和されたことがわかった。このように地域子育て支援拠点事業は、子育て中の親子が気軽に集い、相互交流を行ったり、子育ての不安や悩みを相談したりすることで、育児負担や孤独感を軽減できる場所として、地域の子育て支援に重要な役割を果たしていることがうかがえる。

一方、民間でも、家庭の経済的面の支援と居場所づくり的な意味をねらいとした「子ども食堂」等の取り組みが行われている。本研究で扱う夜間託児施設がある富山県南砺市やその近隣市町村でも実施されている。南砺市にある市民団体「福野アソシエイツ」は、2022年から夜間託児の事業を計画し、2024年から夜間託児施設を運営している。きっかけは、地域の飲食店の経営者からの、「ひとり親の従業員が、夜勤務で働きたいものの、家庭で未就学の子ども

の世話をしなければならず、入れない。そのスタッフは親族も頼れる状況にない。」という相談であった。ひとり親家庭は経済的に困窮している割合が高く、賃金が高い夜間に働きたくても、子育てをしていて出られない場合がある。地方においても、夜間保育や夜間託児の存在意味があるのではないかと考え、内閣府の休眠預金等活用制度を活用し、事業化した。本事業は、子どもを夜間に預かる事業であり、保育事業を夜間に行うことを指す「夜間保育」ではなく、預かりを行う「夜間託児」としての活動に該当する。ただし、夜間に子どもを預かっているという状態を検討するため、本研究では「夜間保育」と「夜間託児」とを切り分けず議論する。

夜間託児施設を運営するにあたり、本団体が所有する古民家を利活用、修繕し、預かりが可能となる認可外保育施設の基準を満たす施設にした。認可外保育の施設として建築的な許可を得るための古民家の改修における困難、夜間託児の事業を施設がある地域で認知してもらうことの難しさ、運営スタッフの確保等、山積した課題を解決し、1年半の準備期間を経て2024年の夏に事業を開始した。

しかし、設立したものの利用の問い合わせはあまりなかった。大江（2019）は、夜間保育を取り巻く現状と課題を整理し、夜間保育が整備されない理由を、幼い子どもが夜間に家庭外で保育を受けることは子どもがかわいそうであり、大人の犠牲になっているのではないかと、夜間保育の実施はかわいそうな子どもと身勝手な親を増やすのではないかとといった「夜間保育」から想起される短絡的なイメージで思考を留め、夜間の就労と保育を要する現実の親子が抱える問題を受け止め、理解し、必要な環境を構築するところにまで多くの人々の意識と想像力が及ばぬまま、現在に至っているところだと指摘した。特に地方では、夜間保育を行う施設が少なく、大江（2019）の指摘にあるように、夜間保育への偏った見方が大きいために夜間保育への関心が低いことが考えられる。あるいはそもそも夜間保育のニーズが少ないのか、またニーズがあったとしても、具体的にどのような点にあるのかがはっきりとしていない。

そこで本研究では、地方において夜間保育、夜間託児のニーズがどのようにあるのかを調査したい。また、子育て世代の保護者はどのような支援を必要としているのかを明らかにしていく。その中で、地方の夜間保育を取り巻く意識や環境について考察することを目的とする。

2 方法

(1) 調査方法

富山県南砺市、小矢部市、砺波市を中心とした中学生（12歳）未満の子どもを育てる県西部の保護者を対象として、アンケート調査を行った。本事業を運営するメンバー

からSNS等を通じて依頼し、インターネットにより回答を得た。調査期間は2024（令和6）年12月16日から12月28日であった。回答者数288名であった。

(2) 調査内容

調査内容は以下の通りである。

①回答者の基本属性

回答者の基本属性として、居住地・年齢・子どもからみた回答者の続柄・家族構成・子どもの数・回答者の就労状況について尋ねた。

②子育て支援について

回答者に「現在利用している子育て支援サービス」を選択してもらい、「現在の保育、子育て環境で困っていること、足りないと感じること」、「地域にどんな子育て支援サービスがあったらよいと思うか」を自由記述で回答してもらった。

③夜間保育について

夜間保育についての意識を聞く質問をした。「夜間保育があったら利用したいか」、（利用したいと回答した人に対して）「利用したいと感じる理由・利用したい曜日・利用したい時間帯・利用する上で重視する点・理想的な利用料」、（利用したくない、わからないと回答した人に対して）利用したくない、わからないと回答した理由について質問した。

(3) 分析方法

本研究では、まず地方における夜間保育のニーズと、子育て支援サービスについてのアンケート結果をまとめた。そして、回答の集計に合わせて基本属性による回答の違いがあるか分析をした。

3 結果と考察

(1) 調査結果1 —基本属性—

基本属性は表1のとおりである。

表1 回答者の基本属性

	N=288
居住地 (N=284)	南砺市 197 (69.4%) 小矢部市 39 (13.7%) 砺波市 28 (9.9%) 高岡市 13 (4.6%) 他 7 (2.4%)
保護者の年齢 (N=288)	30代 108 (37.5%) 40代 159 (55.2%) 20代 7 (2.4%) 50代 12 (4.2%) 他 2 (0.6%)

アンケート 回答者 (子供との間柄) (N=284)	母親 161 (56.7%) 父親 122 (43%) 祖母 1 (0.3%)
家族構成 (N=288)	核家族：両親（ふたり親）と子どものみ 119 (41.3%) 3世帯同居：両親と子ども、祖父や祖母等（同居） 100 (34.7%) 近居：両親と子ども、祖父や祖母等（敷地内同居～車で5分程度の距離） 53 (18.4%) ひとり親家庭：ひとり親と子どものみ 10 (3.5%) ひとり親（実家・同居）ひとり親と子ども、祖父や祖母等 4 (1.4%) 他（4世帯同居等） 2 (0.7%)

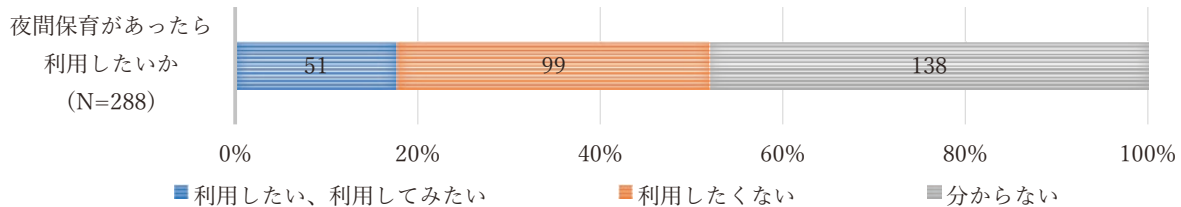
子の人数 (N=288)	1人：51 (17.7%) 2人：148 (51.4%) 3人：75 (26.0%) 4人：12 (4.2%) 5人：2 (0.7%)
-----------------	---

(2) 調査結果2－アンケート結果－

A 夜間保育に関して

①「夜間保育があったら利用したいか」の質問に対して、「利用したい、利用してみたい」：51 (18%)、「利用したくない」：99 (34%)、「分からない」：138 (48%) と半数近くが、「分からない」と回答している。また、「利用したくない」の割合も高いことがわかった。夜間保育が、そもそも子育て世代の保護者に子育て支援の一つの選択肢となっていない、認知されていない可能性が考えられた。

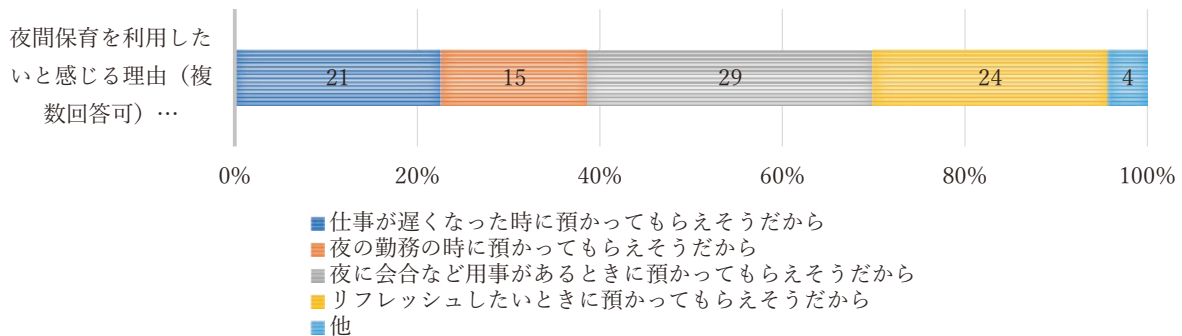
図1 夜間保育があったら利用したいか



②「利用したい、利用してみたい」と答えた人に対して、「夜間保育を利用したいと感じる理由（選択肢・複数回答可）」を聞いたところ「夜に会合など用事があるとき」、「リフレッシュしたいとき」、「仕事が遅くなったとき」の順で回答が多かった。本事業をはじめたきっかけであった常時

夜間勤務の仕事に対しての利用というよりは、「仕事が遅くなった時の預かり」や「夜の会合など用事があるとき」、「リフレッシュしたいとき」といった回答が見られ、常時的な利用ではなく、一時的な利用のニーズがあると考えられる。

図2 夜間保育を利用したいと感じる理由（複数回答可）(N=51)



③「利用したい、利用してみたい」と答えた人に対して、利用したい曜日を聞いたところ、金曜、土曜、木曜の順に回答が多かった。また、利用したい時間帯としては、17時、18時、19時預かり開始、21時、22時預かり終了の順で、回答が多かった。平日の保育所・幼稚園、学童の終了後の2～3時間の預かり利用のイメージであり、夜間を通しての利用ニーズは少ないと考えられる。②でも述べたように、仕事が遅くなったときや夜の会合などが入った際に数時間の間、利用したいという状況がうかがえる。

④夜間保育を「利用したくない」、「分からない」と回答した人に、その理由を選択肢（複数回答可）で回答してもらったところ、多い順に「今の生活に必要なから」：201、「子どもがかわいそうだから」：62、「サービスの内容がよく分からないから」：40となった。夜間保育を今の生活に必要としていない家庭が多いことが分かった。②と③で述べたように、夜を通してではなく、夜の2～3時間、そして一時的な利用のニーズが中心と考え、各家庭で「頑張ればなんとか対応可能」の範疇に収めることができ、夜

図3 夜間保育を利用するとしたらどの曜日に利用したいですか（複数回答可）

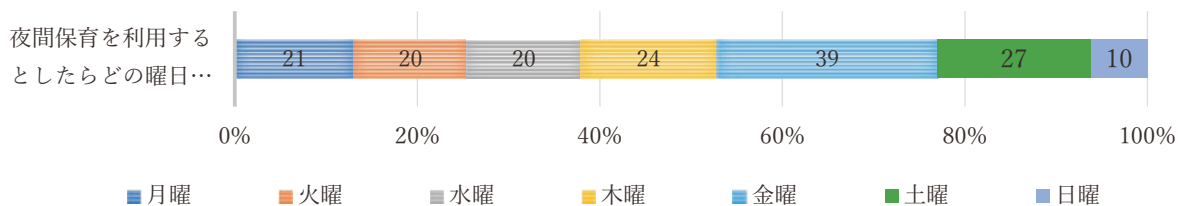


図4 夜間保育を利用するとしたらどの時間に利用したいですか（利用開始時間）

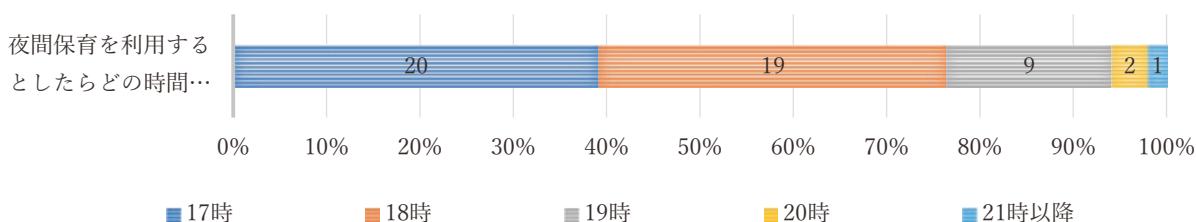
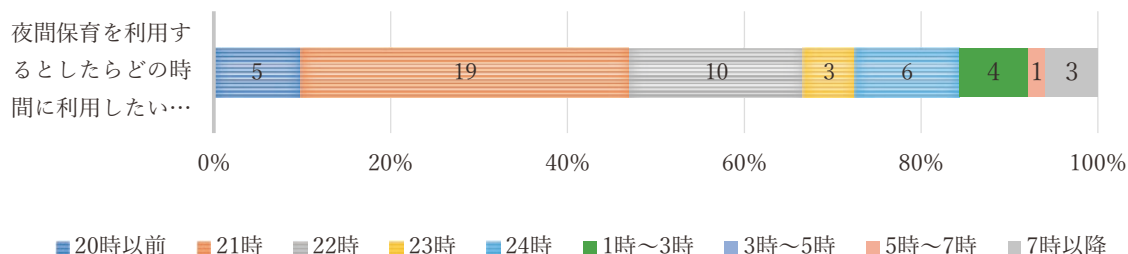


図5 夜間保育を利用するとしたらどの時間に利用したいですか（利用終了時間）



間保育といった子育て支援を支援の一つの選択肢として使っていく、とはなりにくく、認知が広まりにくいと考えられる。また、「子どもがかわいそうだから」という回答も多く、大江（2019）の指摘にあったように夜間保育に対する偏った見方や夜間に子どもを他人に預けることへの抵抗があることもうかがわれた。加えて、「サービスの内容がよく分からないから」という回答から、夜間保育という施設が認知されていない現状も散見された。

B 子育て支援サービスについて

現在の子育ての環境についての意識、必要としているものについて回答してもらった。以下の①②の2つの質問項目で回答が多かったものをまとめると次のようになる。

①「現在の保育、子育て環境で困っていること、足りないと感じることはありますか」

- ・ 子どもの遊び場がない（休日の遊べる場所、雨の日、夏の日、遊べる場所、屋内の遊び場所）：29
- ・ 子どもの預かり（土日に預かってもらえる場所、放課後に預かってもらえる場所、預かりの時間）：15
- ・ 送迎（習い事、学校への送迎）：8

他にも、物価高騰による経済面での不安、小児科等の医療機関の充実、子どもの病気に伴う欠勤について、子育て

で忙しく自分の時間がもてないことや困った時の相談相手が見つからない等の心理面の回答もあった。

②「地域にどんな子育て支援サービスがあったらよいと思いますか。」

- ・ 子どもの遊び場（全天候型、屋内の遊び場、公園）：24
- ・ 子どもの預かり（土日に預かってもらえる場所、短期間預かり）：19
- ・ 送迎（スポーツ少年団へ送り、巡回バス）：18

他にも、家事サポート、集まれる場所（子ども食堂）の充実、体験活動の場、学習支援サービスなどの回答が見られた。

この2つの質問項目は、足りないことと必要なことであり、似たような回答が得られるものの、困っていることはより子育て環境への重要度、緊急度が高めの回答であることが予想される。

夜間保育の利用希望の有無と、子育て環境で困っていること、あったらよい子育て支援サービスの回答の内容等について、回答数や回答内容に関連性は見られなかった。したがって、夜間保育を期待している家庭が、子育て環境に過度に不満や要求をいだき、特定の支援サービスを望んでいるとは考えにくい。また、あったらよい子育て支援サービスとして、土日、休日の預かりサービスについての回答

が19件あり、夜間保育だけでなく、一時預かりのニーズは一定数あると考えられる。

(3) 属性による夜間保育利用希望の分析

①「夜間保育を利用したい、利用してみたい」の回答者と家族構成

「夜間保育を利用したい、利用してみたい」の回答者と家族構成をクロス集計して分析した。「利用したい、利用してみたい」の回答者内の総数では母数が大きいため核家

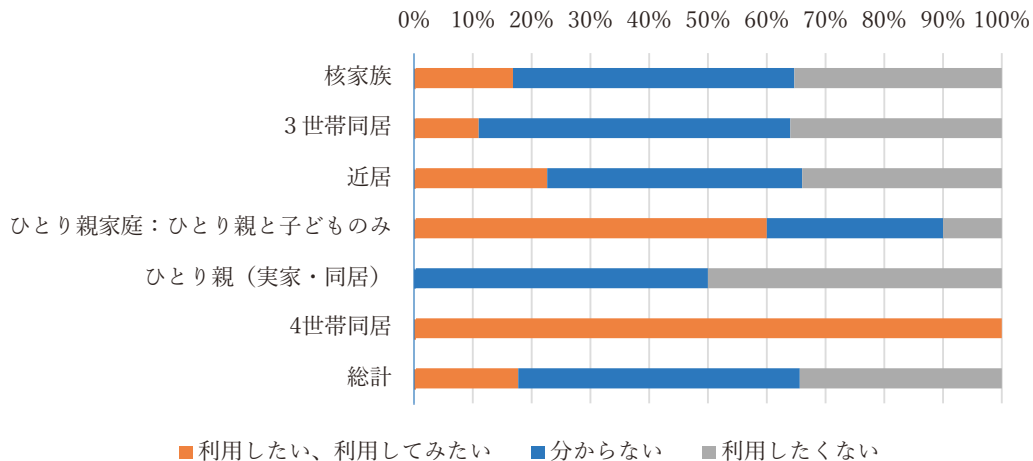
族の回答が多い。しかし属性ごとの割合を見たところ、ひとり親家庭の回答者における利用希望の割合が高いことが分かった。また、家族構成が近居の回答者内の利用希望の割合も高く表れていた。3世帯同居の回答者の割合が低いことから、3世帯同居家庭については祖父母のサポートが得られやすく、夜間保育の必要性は低いことが予想される。しかし、近居の場合、祖父母世帯のサポートが得られやすい距離と思われるが、心理的に頼みにくい状況等があるかもしれないことがうかがわれた。

表2「夜間保育があったら利用したいか」の家族構成ごとの回答
(カッコ内は家族構成ごとの回答における割合)

	利用したい、 利用してみたい	分からない	利用したくない	総計
核家族	20 (16.8%)	57 (47.9%)	42 (35.3%)	119
3世帯同居	11 (11.0%)	53 (53.0%)	36 (36.0%)	100
近居	12 (22.6%)	23 (43.4%)	18 (34.0%)	53
ひとり親家庭：ひとり親と子どものみ	6 (60.0%)	3 (30.0%)	1 (10.0%)	10
ひとり親（実家・同居）	0 (0.0%)	2 (50.0%)	2 (50.0%)	4
4世帯同居	2 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2
総計	51	138	99	288

図6「夜間保育があったら利用したいか」の家族構成ごとの回答

家族構成 × 夜間保育を利用したいか



②「夜間保育を利用したい、利用してみたい」の回答者と子どもの数

子どもの人数と夜間保育の利用についてクロス集計して分析したところ、子どもの人数が1人の家庭の回答者において利用希望の割合が高く表れた。さらに、そのうち10件が3歳以下の子どもという回答であった。子どもの数が2人や3人の家庭における利用希望の割合は高く表れていないことから、子どもの人数ではなく、初めての子育ての中での不安や負担等が夜間保育の利用希望の回答につながった可能性が考えられる。

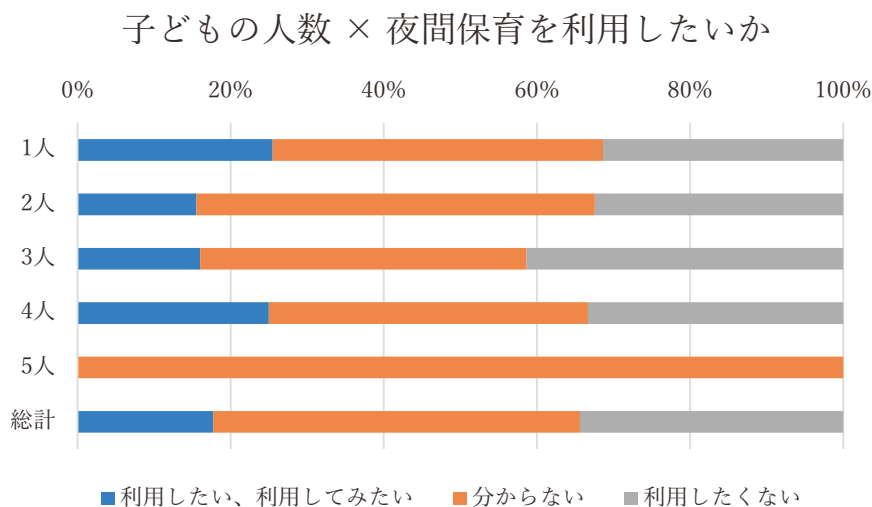
4 総合考察および課題と展望

本研究では、地方において夜間保育、夜間託児のニーズがどのようにあるのかを調査し、地方の夜間保育を取り巻く意識や環境、子育て世代が必要としている子育て支援について考察することを目的としていた。今回の調査より、夜間保育施設には、夜の時間帯に会合や仕事などが入った際に、2～3時間程度預かってもらう一時預かり的なニーズがあることが明らかとなった。また、3世帯同居と近い近居の形や、子どもの人数が2、3人よりも1人の方がアンケートの回答者の割合に対して夜間保育のニーズが高く

表3「夜間保育があったら利用したいか」の子どもの人数ごとの回答
(カッコ内は子どもの人数ごとの回答における割合)

	利用したい、利用してみたい	分からない	利用したくない	総計
1人	13 (25.5%)	22 (43.1%)	16 (31.4%)	51
2人	23 (15.5%)	77 (52.0%)	48 (32.4%)	148
3人	12 (16.0%)	32 (42.7%)	31 (41.3%)	75
4人	3 (25.0%)	5 (41.7%)	4 (33.3%)	12
5人	0 (0.0%)	2 (100.0%)	0 (0.0%)	2
総計	51	138	99	288

図7「夜間保育があったら利用したいか」の子どもの人数ごとの回答

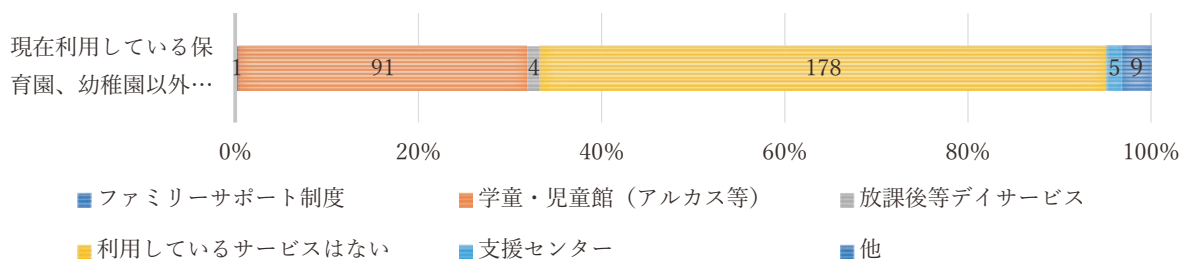


出ていたことから、物理的、環境的要素だけでなく、心理的な面が子育ての支援のニーズに影響していることが確認された。加えて、アンケートを通して、どのような子育て支援サービスがあったらよいかが示された。そして夜間だけでなく、休日の一時預かりのニーズがあることも見ることができた。一方で、地方において夜間保育・夜間託児のニーズは存在するものの、その認知度が低いことも明らかとなった。夜間保育施設が子育て家庭にとって、身近で親しみの持てる存在になるように、広報活動等を積極的に行う必要があることがうかがえる。

残された課題として、夜間保育のニーズと実際の利用ま

でに存在する要素の分析がある。本夜間託児事業は、利用できる体制は整えられているものの、現時点で利用実績はない(2025年12月現在)。潜在的、顕在的な夜間保育のニーズがあるにもかかわらず、実働に至っていない状況である。「あったらいい、あってほしい」と「実際に利用する」までの間隔は大きく、まだいくつか壁が存在するのではないだろうか。アンケートの質問で、現在利用している子育て支援サービスを聞いたところ、直接子どもを預ける「ファミリーサポート制度」を利用していると回答したのは288件のうち1件であった。

図8 現在利用している保育園、幼稚園以外の子育て支援サービスはありますか



ファミリーサポート制度は行政がサービスの情報を出産時に提供し、利用を促進している。この制度は近年始まった制度ではなく、認知自体も一定程度広まっていると考えられる。しかし、アンケートの結果から利用が少ない現状を踏まえると、サービスの認知の有無だけでなく、実際に他人に子どもを預けることへの抵抗が、大きな要素になっ

ているのではないだろうか。これは、夜間保育に対して関心があるものの、利用がない現状とつながっているのかもしれない。よって、ファミリーサポート制度が利用される状況、利用しない理由等を分析することが、夜間保育のニーズと利用の間にある要素を明らかにすることにつながると思う。今後の検討課題としたい。

引用文献

浅井拓久也 2020 地域子育て支援拠点での子育て支援に関する研究 ―拠点利用前後における母親の子育て不安の変化に着目して― 秋草学園短期大学紀要, 36, 24-37.
大江まゆ子 2019 夜間保育の歴史的変遷と夜間保育を取りまく環境の考察 ―夜間保育をめぐる文献研究から― 人間環境学研究, 17 (2), 127-138.

こども家庭庁 2025 令和7年版こども白書
<https://www.cfa.go.jp/resources/white-paper/r07> (2025年11月13日閲覧)
こども家庭庁 2025 地域子育て支援拠点事業について
<https://www.cfa.go.jp/policies/kosodateshien/shien-kyoten> (2025年12月15日閲覧)

